

【『琅』三十五号・あとがき】

本号の原稿がほぼ出そろい、刊行に向けての編集作業に取り組んでいるところに、今年のノーベル医学・生理学賞を日本人が受賞した旨のニュースが飛び込んで来た。喜ばしいことであり、どんなことが語られるのか楽しみに、記者会見やニュースを覗いていたのだが、一つ気になる発言があった。

科学者を目指す子どもたちへのメッセージを請われた受賞者の答えの中に、「教科書に書いてあることを信じるな」との一言があった。全体を覗けば、その意図するところは理解できなくはないが、受賞者の言葉だけに重いものがあり、子どもたちにその意図通りに伝わるのか、いささか心配になった。

この言葉を聞いて、思い出したことがあった。半世紀以上も前、入学したばかりの大学の自然科学系の授業で、「中学校や高等学校では***と習っただろう。あれは全部間違いだから・・・」といったことを滔々と述べる教授がいた。しゃべっている当人は、大学の学問の優越性(?)を言いたかったのだらうが、聞かされている側としては、これから間違いいではない、真の学問の一端に触れるのだという期待感よりは、それまでやってきたことが否定されたような気がして不快感を覚えたのだ。しかも、私が在籍していたのは教員養成大学であった。ということ、この大学では間違ったことを教えていたということになるのではないか。

受賞の喜びを伝えるテレビのワイドショーでは、受賞者の学校時代のワンパクぶりが、面白おかしく

取り上げられることもあった。それは、まるで学校からはみ出ることが受賞の条件とでもいいたいな感じだった。

学校の規格に納まらなかった奇才・異才としてエジソンやアインシュタインの名前があることがある。だからといって、規格外であることが奇才・異才の条件という訳ではあるまい。

公立の学校教育の中で使われている教科書は、いわば憲法みたいなもので、そこに書かれていることを否定されたら、学校教育は成り立たなくなるのではないか。文科省の肩を持つつもりはないが、教科書作りに励んで来た人たちが、受賞者のこの発言をどのように受け止めたのか気になるところである。

受賞を報じる報道の中で、基礎研究の意義についての質疑があった。これは、昨今の応用研究重視の風潮に対する抵抗で、国がどう答えるのか知りたいところだが、それよりも、学校教育否定につながりかねない受賞者の発言を、文科省はどんな思いで聞いたのか、知りたいところである。

(茂治)

〈次号原稿締め切り日〉 二〇一九年三月末日

『琅』三十五号 二〇一八年十月 発行

編集・発行人 松村 茂治

発行所 252-0143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-19

「琅の会」 Ⅷ(〇四二一七七三―五九二七)

印刷所 株式会社ポブルス